

急ぎ過ぎだよ 人類は。  
ゆるやかなネットワークを目指す

ITより  
逢いてエ

# 雑報 綴文

いろいろ差えがあつたら面白い  
いろいろ人がいるのが楽しい

No. 542

2020年4月

深夜便

編集・発行 鈴木厚正

〒266-0005 千葉市緑区菅田町2-21-359

T&F 043-291-2917

も・く・じ

- あの山の向こうに ⑩
- 皇月端午の節供
- 「老人初心者の覚悟」ほか
- お便利から
- コロナ改革を
- 京丸山
- コロナ日記

頁  
2  
4  
5  
8  
12  
15  
23

## 気を付けます。

ワクチンや特效薬ができて  
収束するまで、時間がかりそう。

ぼくは病院に行くつもりがないので  
感染しないよう、移さないよう、  
気を付けます。

息子さんのマスクをつけて。

出られない、  
テニスもため、  
だから  
週刊誌に  
なっちゃった。



この見本誌をみて新たに

「読んごみようか」という方は、

2020年3月までの 毎月  $\times 250$ 円 = 円を

郵便局で 00100-2-20630

「雑報友の会」

へ 申し込み下さい。

月 日 現在の  
会員数 名

題 字 故 佐村隆英和尚 (千葉県長柄町本光寺住職)

カ ッ ト : 泉ゆきをさん (にっぽん箱絵の会会長)

印刷機 リソグラフ RZ 330

※この号の切手は、いろいろ。

# 京丸山

この春はサクラの花もちがよく、至るところで花に出会った。

4月3日(金)、東京駅で原田さんと二人、いつもの8:18発、熱海行き快速アクティにのる。沿線はサクラに若葉が混じり、よい気分だ。

掛川駅で久米さんの車に迎えられる。直接薄場へ。花に囲まれあたたかい陽光の注ぐ草の斜面に、竹中さんの手でテーブルと椅子が設えられ、久米さん手作りの料理が並んでいる。まもなく正士さんと若林さんが到着。地元の中村のらば(あ)さんとケ名で「薄場の花見」の始まりだ。

カメラは正士さん



ご馳走は、根菜の煮物、ブリの照り焼き、ホタルイカとノビシの煮物、ツクシの煮浸し、炊き込みご飯とお稲荷さん。ビールと竹中さん持参の「開運」で宴が始まる。

竹中さん(写真奥の立ち姿)が天ぷらを揚げ始めた。材料は、家のまわりにある、タラの芽、ワラビ、フキトウ、ツクシ、ミツバ、ダンポポ、

サンショウ、ヨモギ、カラスノエンドウに原木シタケナスと野趣豊かだ。しめは、中村さんの汁粉と、素敵なおランチだ。満腹して眠気がさし、草の上でウトウトする。No.539の22ページで「薄場」の由来を紹介したが、菅原道真公の家臣薄場某が諸国をさまよった末、ここに安住の地を見出したのがよくわかる。

片付けを終え、中村さんを除く6名で大平に向かう。<sup>白井</sup>途中、「森の石松」の墓がある大洞院、遠江国一之宮の小國神社の前を通る。6月には、泉ゆきをさんと石松の墓にお参りする予定だ。それまでに収まってくれるとよいが。

買物をして正士さんちに着くと、夕方。久米さんと英ちゃんが用意してくれた夕食は、カレイの煮付け、豆腐のサラダ、エビダマとワケギのぬた、ナスの煮浸し、キャバツヒ人参の梅肉炒め、ニラの卵とじ、若林さん提供の「楯の川」でいただく。しめは勿論、正士さんの手打そばを久米さんのだしとそば、明日に備えて、早目に散会。

明日登る京丸山に関し、山崎さんが探してくれた資料(奈江さんから)を次に要約紹介する。



山崎さんがインターネットで見つけてくれた藤原家に関する資料(要旨)

三信遠 南ア 深南部にある南北朝抗争の南朝方道跡。

京丸山は、遠州七不思議のひとつ、カラカサほどもある謎の京丸ボタンの咲く山。

天竜川の大支流気田(けた)川に流入する京丸川のほとり詰まりに、京丸部落があった。いま残る住家は、藤原家のみ。その第18代当主藤原忠教氏が1980年に亡くなり、19代真氏は、ふだん春野町気田に住まい、京丸にはときどきしか帰宅しない。京丸には柳田國男も書き残し、折口信夫、深田久弥も京丸山に登っている。

江戸中期の「遠江古跡絵図」には「平家の落人」とあるが、ちがう。柳田は京丸を直接訪れたことはなさそう。定本柳田國男集第20巻「地名の研究」の54京丸考に掛川誌からの引用がある。(次ページ参照)

地元郷土誌家の調査によると、京丸部落の起源は、藤原家に伝わる南朝落人の伝説に沿ったものである。それは、

「南北朝の頃、後醍醐天皇が足利尊氏に追われ、信州に逃げのびた際、供奉した藤原左衛門佐らは、天皇が信州浪合(下伊那郡浪合村)で崩御されたのでそこに葬り、首級を高津山(京丸山の稜線にある)に葬り、自分たちは近くの京丸に住みついで塚を守護してきた」とある。

だが歴史的文献には、後醍醐が遠州に来たという記録はない。存在するのは、第三子、歌人として知られた宗良親王のものである。

宗良は、信州大河原(大鹿村)を根拠地として、北朝足利方に対しゲリラ戦を展開した。その中心となったのが宗良の第二子尹良(コレガ又はユキヨシと読む)だった。「浪合記」によれば、尹良は応永31年(1424年)浪合村で防戦及ばず自害とある。従って、左衛門佐らが高塚山に埋めたのは尹良の首級であろう。

藤原家の紋章は16弁薔薇。これは木地師のものと共通する。本来、天皇家の紋である。三遠南信(三河・遠江・南信濃)は、木地師の日本最大級の根拠地。

ボタン姫の哀話。旅の若者が姫と駆け落ちし、再び京丸に戻った姫を京丸の掟は許さず、二人は橋から身を投げて死ぬ。

京丸が初めて文献に登場するのは、大岡検地。慶長4年(1600年)の記録では、15軒の家屋が存したとある。1930年には、小俣京丸と京丸で21戸113人があった。

藤原家の木戸の脇に、京丸山の朽ちた道標がある。そこから続く良い山道を行くと、左の尾根に登る分岐があって、再び道標があった。それに従って左へジグザグに登っていくと、樹林帯を抜けて広大な伐採地に出た。そこからはイバラの荒廃した踏み跡になって、イバラに苦しんだ。廃道化した枝尾根をつめて上の支尾根にでると、植林地帯のよい踏み跡になっていた。これは、伐採跡地をさけるよい迂回コースで、勞せず藤原家に達する。これを詰め上がると、洞木沢から京丸山への主尾根に出た。目の前は藤原家の前の林道の終点であろうか。駐車場のような広場になっていた。

途中、ヤシオツツジのやせ尾根で緊張する箇所もあったが、藤原家から2時間ほどで山頂に着いた。10畳ほどの小平地で、立派な標識がある。展望はよいとはいえない。

我邦の海岸近い低地に住む人々は、山を知らなかつた海部の子孫でもあるのか山家の生活に付いていつもえらい誇

の周智郡氣多村大字小俣京丸の一部である。人の住む在所である。路が遠くて悪いのは人家の数が少なく経済力が弱

い爲である。偶々其土地の名を奥山などと呼ぶ爲に、不當な概念が出来てしまつた。山中の牡丹と云ふことは、既に

柳里恭が雲萍雜誌にも之を認めず、單に色紅にして黄を帯びたる花とある。石楠花だらうと云ふことである。然るに

馬琴は其紀行に京丸の傳聞を記して、巨大なる花片流れ出るなど、殆ど武陵桃源を以て之を視たのみならず、更に

其作のたしか稚枝鳩か何かの中に、此地の事を取入れて額瀨城の古譚の燒直しを試みて居る。併し私は奥山の人奥山

君を知つて居るが、同君も義理で少々は合槌を打つがよく聞くと唯淋しい一山村と云ふに過ぎぬやうである。地圖で

見ても奥山は天龍の水域でさして僻遠の地では無い。三河を廻れば村中まで車も通ひ、製絲其他の工場もある。其小

俣字京丸は唯此から入込んだ谷合と云ふだけである。要するに一個の結構な盆地で、今こそ輕便鐵道を架ける話が

無いから偏鄙など、云ふが、四隣を山川で斷ち切つて纏まり宜しく、しかも出端の悪くない點から見れば、武家時代

に於ては誠に理想的の一莊園である。掛川志にあつたかと思ふ。奥山郷は五村に分れて居るとある(山中の村には五箇

と名づけ五の部落より成るものが多いのは何故であらうか)。今の周智郡奥山村大字奥領家及び大字地頭方、同城西村大字相

筑摩書房『定本柳田國男集』第20巻から。

明くる4月4日(土)晴。7:14、正士さんちを出発。春野町の協働センターに着くと、久米、竹中さんに尾上美智子さんと嬢さん、桧御さん他が待っていた。尾上さんは、同じ春野町に住む藤原家の当主に頼んで林道ゲートの鍵を借りてもらうよう、若林さんがお願いしたものだ。尾上さんは急な依頼にもめいわらさず、面識のない藤原さんから承諾をとりつけて下さったのだ。林道を車で通れば、往復で2時間ほど短縮できる。ありがたいとともに、改めて春野町における尾上さんの存在の大きさを知らされた。車4台を連ねて気田川に沿って上流へ。ケタ川は天竜川最大の支流で、ダ

ムがほとんどないらしく、清流で知られる。

旧気多村の中心気田(けた地区)の藤原さん宅に到着。犬三匹が出迎之。ご夫妻が出て来られ、挨拶。尾上さんが手土産を用意して下さり、こちらも若林さんが入手してくれた「楢の川」を進呈。藤原さんが旧藤原邸まで案内して下さいになった。



若林さん 藤原さん

藤原さん先頭に車5台を連れて出発。気田川の支流杉川からその支流の石切川、そのまた支流の京丸川へと分け入る。一般車も通れる林道の先に、旧藤原家に通じる林道のゲートで、藤原さんがゲートをあけて下さる。ここから先は藤原さんの私道で、京丸山まで藤原さんの持山がひろがっているそうだ。

ゲートから先は昨秋の台風の影響が残る。落石や落ちた枝などがあちこち、車を降りて取り除きながら進む。5kmを進むのに20分ほどかかった。

旧藤原家の手前、林道がヘアピン状に曲がるところで、藤原さんが車を停めた。「銘木館」で見た直径3mもの「長蔵杉」の跡を見せてくれるのだ。橋の上から、この真下だと指示す。しかし、半世紀近くたった今、切株は土砂に埋もれたようで、目を凝らしてもわからない。藤原さんは、伐採・分割され、ハリコプターで搬出されるところを目撃されたそうだ。



そこからわずか藤原家へ。40年ほど前にここを引き払ったそうだが、家はしっかりしている。縁先で記念撮影。後列がガレになっている人は顔が黒くなって、ご色。

しばらく、屋敷のまわりを見せよう。近くにたつスギは、直径2.5m。長蔵杉よりひとまわり小さいが、それでも5~6人が手をつないでやっとという大きさだ。



近くに神社もあった。小さいが、格子状の天井には絵が描かれている。暗くてよく見えないのが残念だ。

藤原さんが、「仕事がある」と言って、排土板?をつけた小型トラクタのエンジンをかけ始めた。お礼を言って別れ、家の上にある墓地の前の平地に駐車。おどろいたことに、すぐに



平  
 子上がりそうな小さな水溜まりに、ヒキガエルの卵がうじゃうじゃいる。今朝の中日新聞にあった「鞍馬の急」(こぶの急。車のわたちの水の中、もがき苦しむナ)という言葉思い出す。

ここまで下山する尾上さんたちと別れ、荒れた林道を辿る。荒れ方は必、とても落石を片付けたくらいでは通れそうもない。斜面は急で、うっかり踏みはずすと谷底まで一直線だ。

家の近くには、ミツマタがたくさん生えていて、うす黄色の花を咲かせている。おそらく、スギを植える前は、和紙の原料として採取したのだろう。しばらく杉林が続くが、手入れしていない林の方が多かった。

やがて、ヒメシャラが多く見られるようになった。幼木が並木のように林道沿いに並ぶ。近くには母樹らしき大きなヒメシャラが実在する。道端に「炬燵羅のみち」と刻んだ立派な標柱があった。しかし、それ以外に一切案内表示らしきものはない。



1時間余りかかって林道の終点らしきところに来た。丁度正午で昼食にする。ぼくらは、朝大急ぎで握ったにぎりめし。殊さんと竹中さんが菓子などくれた。

そこから、京丸山に向かって西北方向へ尾根歩きが始まる。図上「笹ヤガ」とある一帯だが、数年前に笹はすべて枯れたようだ。それでも倒れていないのは、意外に雪が浅いのだろうか。

林道終点と山頂との中間にある1305mのピークに到着。ここで正士さんが引き返す。残るは5人。少し速度を上げる。

1305m峰の先は、岩のヤセ屋根が待っていた。この辺からアセ(シ)ビク(馬酔木、ツツジ科)がふえてきた。奇妙なことに、高度を増すごとに木が大きくなり、開花も早い。山頂近くで

は、大きなものは直径20cmを越すほどだ。

この所ほどロープがとりつけられたヤセ尾根は、ちよびりスリレがあったものの無事通過。あとは一本調子の急登が続く。こうなるほど一番強いのは英ちゃんだ。先行して姿が見えなくなったと思うと、岩の上でケーナをとり出し、「笛吹き童子」となっている。

14:10、京丸山(1469m)山頂。三等三角標があり、周囲の木は葉が落ちているので360度の展望がある。しかし、知らない山ばかりだ。

少し休んで下山にかかる。途中、向度もサイレンと高々す緊急自動車の走る音がする。火事ではなさそうだし、なんだろう。

とうに下りたと思っていた正士さんと、林道終点あたりで追いついた。見晴しのでよいところで写真を撮ってもらう。

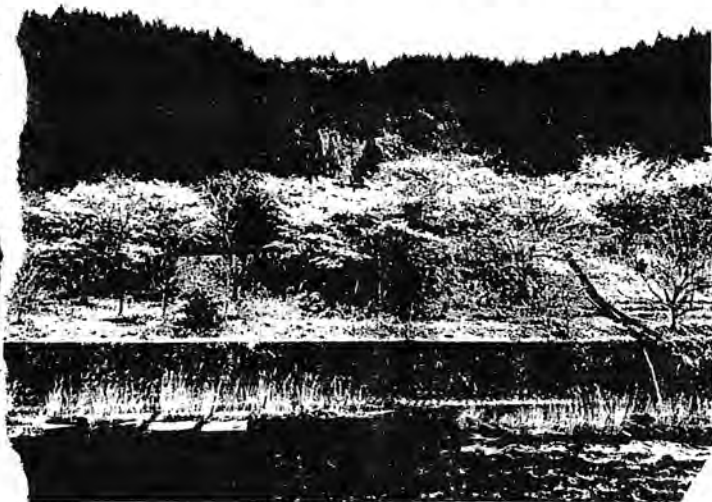
藤原家住宅に戻ると、藤原さんはもう帰られた後だった。林道に散らばっていた石がきれいになっていた。

若林さんが預かっていた鍵でゲートをあける。今朝、ゲート前に停まっていた6台ほどの車は、まだ半分ほど残っていた。途中出会った人たちのうち何人かは、京丸山から西の方にある<sup>かの</sup>門橋発電所のコースのようだ。



気田まで降り、藤原さんに白礼の挨拶。このとき、ほくらが遭難したのではないかと心配されていたことを知った。山中で滑落した人があり、レスキュー隊員が向かったというのだ。幸い、生命に別状はなかったようだ。

夕暮れの迫る中、通い慣れた熊切川沿いの道を行き、長蔵寺の尾上さんのお宅へ。ご主人は元気でフォークリフトを運転しておられた。美智子さんは、藤原さんからの連絡で案じておられたが、顔を合わせると一安心。早速、裏手の庭に出て桜の園を見る。熊切川の対岸に盛りだくさんの桜が立ち並ぶ。ほくらは、対岸の地形も、石の所在も、太いウドの生えるところも知っている。懐かしさがこみ上げる。尾上さんの家をとりにこむようにカーブした熊切川の岸には赤いイネモ。



が其在し。うす暗くなってきた空気の中で、ぼんぼりのように見える。

18時をまわり、別れの挨拶。遅くなつての炊事は大変だると、お嬢さんが作った料理に缶ビールまで添えて下さった。重ねがせねの心遣いに感謝。「あの橋の上からの眺めがいいですよ」と言われて車をまわす。たしかに、前ページの写真では左右に展開した橋が、ここからは線状に重なり分厚な眺めとなっている。



上の杉林は、カットしてある。

右にカーブする川の右岸が尾上さんの石宅だ。本宅は右手奥で見えているのは庭の四阿。橋が突り、石宅のそばを通ると、美智子さんが一人見送っておられた。

そうそう、竹中さんが対岸の柵を見ながら、「あそこを舞台に、なにかやりたい」と言っていた。二段に積まれた蛇籠(じかご。太い針金の網に石を詰め、護岸や土留めに使う)の上に板を置いて舞台とし、なにか演ずるつもりのようなのだ。尾上さんが庭に舞台を造り続けてきた「しなはた(信濃畑)コンサート」は、2年前に幕を閉じた。竹中さんは、尾上さんを煩わすことなく、同じようなことを自力でやるうというのだ。いいですね。尾上さんが許してくれたら、やりましょう。

暗くなった道を、正士さんちへ。夕食は、尾上さんにいただいた。ポテトサラダ、野菜炒め、こんにゃくの炒め煮に沢庵のほか、イノシシの焼肉、ワラビが加わる。シシ肉は硬い。「私しゃ入れ歯で歯が立たない」ぼくのために、久米さんがキッチン鉄を用意してくれました。ありがとう。

疲れて早く薄場に戻るお二人のために、いつもより早く(といっても21時すぎ)におそば。さんなわけ。今回はお母さんとの合唱はなし。

4月5日(日)、晴。竹中さんお和わり、正士、原田さんと4人で庭のヤマモモの整理。長い梯子をかけた枝の上のり、小型のチェーンソーで枝を落としていく。最後に残った直立した枝を切った時、細い枝をつかんでいた左手の上にそれが落ち、はさまれてしまった。すぐに降りて水道でよく洗う。左小指の先端の皮ひがはがれ、筋肉がグチャグチャになったが、指は動かし骨は折れていないようだ。久米さんが枇杷茶(焼酎入り)で消毒、絆創膏をまいてくれたので、





それで終りにするつもりだった。しかし正士さんがどうしても病院へ行けと言ってきた。やむなく従うことにした。生憎日曜日。ふつうの病院はやっていない。正士さんが市立磐田病院の救急外来に電話をして、車で向かった。(また、水野俊哲さん(上田市)に笑われかけた)

しばらく待たされ診てくれた医師は、又線導真と云う。とった写真をみても何も云わない。そして、膝が露出しているのが傷ついていないか整形外科の先生にみせろやうという。しばらくしてやってきた医師は、「大丈夫のようだ」という。ぼくは初めから骨も膝も異状がないと思っている。なんだから、あちこち儲けさせているように思えた。

そして請求された額が44,310円。ぼくはちゃんと後期高齢者保険証を持って行ったのに。勿論、そんな持ち合わせはない。正士さんと連名で誓約書を書いて解放された。ぼくの病院嫌いがまたひとつ強くなった。

正士さんに戻ると13:30。いつもの12:56発には間に合わない。久米竹中、原田さんは、カレーを食べずに待っていてくれた。申し訳ない。大急ぎで食べて、次の13:59発にのる。正士、久米、竹中さんの三名が見送ってくれた。姿が見えなくなるまで手を振る。

この時刻は連絡が悪く、敷地発は56分と59分の3分ちがいなのに、家に着いたのは30分も遅い20:40。

その夜、傷が疼いてほとんど眠れず。病院で鎮痛剤はいらない、と断わったのを後悔した。

こうして病院に行ったのは、35年ぶりくらいだろうか。農林規格検査所林産課にいた頃、突然血尿が出たので驚いて虎門病院に行った。診てくれた医師がなんだか頼りなかったので、処方された薬を玄関のゴミ箱に入れて戻った。それがバレて叩かれて以来だ。どうも病院とは相性が悪いようだ。

これで終りではなかった。磐田病院で、「国保の適用ができるか、千葉市にきいてほしい」と言われた。そこで4月10日、緑区役所に出かけた。窓口では、「問題ないと思うけれど、千葉県広域連合に確認する」という。多分、問題はないうらう。その日の夕方、磐田病院の事務から電話があり、どうだったかときかれた。あとは広域連合から連絡がいく筈、とお答えた。もう一度磐田市まで支払いに行くのは大変なので、正士さんに立替えておってもらおうようお願いした。

京又山はよかった。

(後日、一週間後の4月12日、ホーシキとる。変色しているが化膿はしていない。縫合糸は生体によりまわれない糸のようだ。抜糸はどのようにするのだろうか。シャワーは敬遠したが、テニスには支障なかった)

鈴木正士のホームページ 鈴木正士で検索できます。(鮮明な写真が見られます)